

## 開催趣旨

2016(平成28)年度に公益財団法人かながわ国際交流財団が定住外国人や障がい者を含む「すべての地域住民」のミュージアムへのアクセス向上やインクルーシブな教育普及事業の企画・検討を目的として、県内4館の美術館(神奈川県立近代美術館/茅ヶ崎市美術館/平塚市美術館/横須賀美術館)によびかけて始まった「マルパ(MULPA)」プロジェクトは、それぞれの美術館で独自に工夫を重ねた教育普及事業(ワークショップ等)に取り組んできました。外国につながる子ども・若者たちの出会いをもたらした写真ワークショップでは、共に「表現」を創り出す中で「共感」や「自己肯定感」が自然と生まれ、また、アーティストと障がいのある方々との協働体験型のワークショップでは、相互的な「気づき」や「学び」の中でこれまでの「助ける一助げられる」という一方向的な関係性を考え直すきっかけが生まれました。本フォーラムではマルパの美術館2館と、マルパと同様の目的を持ちながらも手法の異なった実践事例を持つ美術館・団体からの報告を同じテーブルに載せ、地域の美術館がアートを介して定住外国人や障がいのある方々とのつながり・絆をどのように持ちつづけることができるか、また、その社会的意義を参加者のみなさんとともに考えていきます。

## タイムスケジュール モデレーター 杉浦 幸子(武蔵野美術大学)

- 13:30～13:50 主催者あいさつ(公益財団法人かながわ国際交流財団/小田原市) 開催趣旨 水沢 勉(マルパ実行委員長)
- 13:50～14:00 マルパ・ワークショップの概要について 野呂田 純一(公益財団法人かながわ国際交流財団)
- 14:00～14:15 実践報告Ⅰ 藤川 悠(茅ヶ崎市美術館) 「インクルーシブデザイン手法を活用したフィールドワークから表現へ」 キーワード:「地域と美術館」「感覚特性」「協働体験からの作品制作」
- 14:15～14:30 実践報告Ⅱ 鈴木 敬子(神奈川県立近代美術館)・野呂田 純一 「外国につながる子ども・若者たちへのエンパワーメント—美術館とアートの力」 キーワード:「自己肯定感」「共感」「美術館という“サイト”の力」
- 14:30～14:45 実践報告Ⅲ 今井 朋(アーツ前橋) 「生きることに寄り添う表現とは何か～“表現の森”の活動から」 キーワード:「相互的な学び/専門分野における既成概念への問い」「事業の質的評価/大学との連携」「見えない価値観の可視化/インリーチとアウトリーチの繰り返し」
- 14:45～15:00 実践報告Ⅳ 野崎 美樹(NPO法人スローレーベル) 「共創のための「人」と「環境」をつくる～スローレーベルの舞台芸術の取り組みから」 キーワード:「アクセシビリティ」「人材育成」「相互補完」
- 15:00～15:20 休憩
- 15:20～16:05 パネルディスカッション
- 16:05～16:20 フロアとの質疑応答
- 16:20～16:30 総括 水沢 勉(マルパ実行委員長)
- 16:30～16:40 休憩
- 16:40～17:30 情報交換会(\*ご参加される方はお名刺をお持ちください)

## 登壇者



モデレーター 杉浦 幸子(すぎうら さちこ) Sachiko Sugiura  
社会設計家/武蔵野美術大学芸術文化学科教授

1990年お茶の水女子大学哲学科美学美術史専攻卒業。1995年ウェールズ大学院教育学部修了。乳幼児、障がい者、外国人を包括する美術館教育(生涯学習支援)プログラムの設計・実施を行う。2001年「横浜トリエンナーレ」教育プログラム担当、2002-04年森美術館パブリックプログラムキュレーターなどを経て現職。2012年エイブル・アート・ジャパン「美術用語の手話化」委員。



実践報告Ⅰ 藤川 悠(ふじかわ はるか) Haruka Fujikawa 茅ヶ崎市美術館学芸員

広島市現代美術館、森美術館、東京都現代美術館の勤務を経て現職。現代美術を専門とし、地域とアーティストをつなぐプログラムや展覧会を実施。主な担当企画「六本木ヒルズ街育プロジェクト-アートのひみつ」(2009)、「じぶんのまわり展」(2016)など。その他、文化庁メディア芸術祭アート部門選考委員(2016-18)、文化庁障害者に向けた鑑賞機会の提供に関する調査研究ワーキングメンバー(2017)、文教大学および女子美術大学の非常勤講師を務める。



実践報告Ⅱ 鈴木 敬子(すずき けいこ) Keiko Suzuki 神奈川県立近代美術館普及課非常勤学芸員

千葉大学大学院自然科学研究科博士後期課程修了。博士(学術)。2017年より現職。千葉大学工学部非常勤講師。(一社)日本写真学会「教育への写真応用研究会」主査。2000年より「写真の力と生きる力」をテーマに「写真の力」を教育や医療、福祉の現場へ還元する実践的研究を行う。不登校や発達障害を持つ子どもたち、パーキンソン病の患者会、高齢者を対象に写真を創造する、鑑賞し合う、つながるワークショップを多数実践。「写真表現による総合学習の教育効果」により2010年度国際画像学会最優秀論文賞受賞。



実践報告Ⅲ 今井 朋(いまい とも) Tomo Imai アーツ前橋学芸員

エコール・ド・ルーヴル(パリ)第一、第二課程修了。「極東のテイスト」展(2011年、ナンシー市立美術館)の企画・監修により第33回ジャポニスム学会賞受賞。2013年より現職。2016年に企画した「表現の森 協働としてのアート」展をきっかけに、前橋市内にある福祉施設や団体とアーティストが協働する5つのプロジェクトを始動、現在までプロジェクトを継続している。アートが福祉・教育・医療のような異なる分野に出会った時に生まれる可能性を時間をかけて観察している。写真©Kigure Shinya 「表現の森」特設サイト <https://www.artsmabashi.jp/FoE/>



実践報告Ⅳ 野崎 美樹(のぎき みき) Miki Nozaki  
NPO法人スローレーベル プロジェクトマネージャー/コーディネーター

University of Leicester MA(Art Museum and Gallery studies)修了。2011年よりアーツ前橋(当時、前橋市美術館開設準備室)に学芸員として勤務後、川崎市岡本太郎美術館の教育普及担当学芸員を経て、2015年8月より現職。子どもから高齢者まで多様なバックグラウンドを持つ人々や障がいのある人々とともにアートプロジェクトや舞台作品を創作するとともに、アート現場のアクセシビリティ向上に向けた研究・人材育成に取り組んでいる。



パネリスト 平井 宏典(ひらい ひろのり) Hironori Hirai  
マルパ実行委員/相模湾・三浦半島アートリンク(SaMAL)幹事

和光大学経済経営学部経営学科准教授、博士(経営学)。専門は、経営戦略、博物館経営。神奈川県真鶴町出身。地域発住民主導アートプロジェクト「真鶴まちな一れ」ディレクター、茅ヶ崎ゆかりの人物館経営アドバイザー、文化庁委託研究事業「博物館の持続可能な経営に関する研究」企画評価委員会座長。「経営/ビジネス」と「文化芸術」の2つの視点から組織や地域の経営力創成を研究している。



開催趣旨 水沢 勉(みざさわ つとむ) Tsutomu Mizusawa  
マルパ実行委員長/神奈川県立近代美術館館長

1976年慶応義塾大学卒業。1978年同大学院修士課程修了後、神奈川県立近代美術館学芸員。2008年横浜トリエンナーレ「タイムクレヴァス」の総合ディレクター。2011年より現職。19世紀末ウィーンの多面的な文化状況に惹かれ、トランスナショナルな文化のありかた、ジャンル横断的な表現の可能性を現代に探ること、そして、「マルパ」のなかに含まれる言葉「unlearning(学びほぐし)」にいま一番の関心を注いでいる。



概要説明/実践報告Ⅱ 野呂田 純一(のろた じゅんいち) Junichi Norota  
(公財)かながわ国際交流財団学術・文化交流グループ(マルパ担当)

1997年大阪大学経済学部卒業。2013年総合研究大学院大学(文化科学研究科国際日本研究専攻)にて博士号取得。1998年に(財)神奈川県国際交流協会(現・(公財)かながわ国際交流財団)に入職後、カナガワピエンナーレ国際児童画展や21世紀ミュージアムサミット等を担当し、2016年度からマルパプロジェクトの事務局を担当。著書「幕末・明治の美意識と美術政策」にて2016年度全日本博物館学会賞。